

日本登山医学研究会より(お誘い)

中 島 道 郎

はじめに

文登研から『日本登山医学研究会より』という執筆依頼を頂いた機会に、わが日本登山医学研究会(以下本会)について、本誌読者の皆さんに本会の趣旨と現在の活動状況についてお話ししたいと思います。これを読まれて、面白いじゃないかと思われた方はどうぞ件間に加わって下さい。

本会設立の目的と経緯

筆者は1970年日本山岳会エベレスト登山隊に加わり、住吉仙也・大森薫雄・廣谷光一郎の諸先生と共に膨大な医学調査資料を持ち帰りました。これを日本で発表しようとする、適当な学会はなく、やむなく日本生気象学会に演題を提出してみたのですが、まるで『場違い』といった冷遇をうけ、非常に悔しい思いをしました。ところがこれを72年、第6回国際生気象学会(オランダ)で発表しましたら、多くの反論や質問を受け、この学問分野における日本と欧米のレベルの違いをまざまざと感じ取りました。それともう一つ、日本は世界有数の登山人口を持ち、当然山岳遭難者数も世界有数であります。この人々を、医学知識の発展と普及によって救ってあげることが出来ないかという思いを抱いておりました。その二点において、日本に登山医学を主たる対象とした研究発表と知識交換の場を持ちたいものだと考えていたところ、日本山岳会医療委員会を中心とした日本登山医学研究会構想が具体化し、遂に1981年5月、東京慈恵会医科大学高木講堂において発足するに至ったものです。

日本登山医学シンポジウム

本会の研究発表の場を『日本登山医学シンポジウム』と呼んでいます。年に1回、各地回り持ちで開催し、今年はその第20回目を6月3～4日、東京慈恵会医科大学(浜口欣一会長)で開催する予定です。第19回迄の開催地と会長、並びに特別講演・シンポジウム・パネルディスカッションの標題の一覧表を[表1]に掲げておきますので、大体どういう話題が取り上げられてきたかご想像下さい。

要するにこの集会は、登山の安全にかかわる医学知識の普及と意見交換の場なのです。それは必ずしも『高所』医学的知識に限定していません。発足当初はそう誤解されたこともありましたが、最近では日本国内の山での研究成果の発表もかなり増えてきました。

また、非医師登山家の中からの発表も(単に人の話を聞くためだけの参加にとどまらず)次第に増えてきました。本会では肩書きによって人を差別しません。職業が医師であるか否か、所属が研究機関であるか否か、そんなものは問題ではありません。ただ発表者の志を問題にしているのです。それが日本の、そして世界の登山者のためを思ってなされた研究であり発表であるなら、たとえすぐそのまま登山の役に立たなくとも宜しい、すべて歓迎致します。

3. 論文

[表1] 日本登山医学シンポジウム19年の歩み (1981~1999)

回	年	開催地	会長とその所属		特別講演・招請講演・シンポジウム
1	1981	東京	北 博正 (大森薫雄)	東京医科歯科大学 (慈恵会医科大学)	会長講演；登山医学の史的展望 —高山病を中心に—
2	1982	京都	中島道郎	京都市立病院	チャールズ＝ハウストン；高山病と高所生理学 脇阪順一；登山と健康法
3	1983	松本	古原和美	信州大学	ロッドマン＝ウイルソン； アラスカ・マッキンレー峰，フォレイカー峰登山中 の死亡例について
4	1984	東京	川久保芳彦	日本大学	翁 慶章；中国登山医学研究の概況について
5	1985	上高地	早田義博	東京医科大学	会長講演；ムスタンを訪れて 自由討論会；無酸素登山をどのように考えるか
6	1986	川崎	長尾悌夫	聖マリアンナ 医科大学	大平充宣；低酸素が細胞の代謝に及ぼす影響
7	1987	京都	斎藤惇生	新河端病院	パネルディスカッション；死線を越えて —体験的サバイバル論—
8	1988	水上 温泉	田中壮信	多野総合病院	鈴木政登；登山と水分補給 川原 貴；スポーツにおける疲労 シンポジウム；登山の危険とむずかしさ
9	1989	東京	藤巻悦夫	昭和大学	脇阪順一；海外山岳100登頂 吉田敬一；人間の寒さへの適応 シンポジウム；山岳診療よりみた安全な登山 ；登山と寒冷高所環境
10	1990	東京	大森薫雄	神奈川県立 厚木病院	広重 力；生体リズムと登山 辰沼廣吉；日本登山医学のおいたち 藤巻悦夫；登山における救急処置 シンポジウム；中高年登山者の諸問題
11	1991	東京	河村栄二	北里研究所	渥美和彦；医学の進歩がもたらす未来社会の諸問題 小林太刀夫；高齢者登山について シンポジウム；高所登山における循環動態 ；多様化する登山に対応する医学は いかにあるべきか

回	年	開催地	会長とその所属		特別講演・招請講演・シンポジウム
12	1992	つくば	浅野勝己	筑波大学	会長基調講演；高所登山の問題点と対策， —高所順応トレーニング— シェリリン＝キング；高山病対策のための救急医学 ロバート＝ワッデル；北米における山岳遭難者捜索 および救助法 脇阪順一；若さを維持する私なりの健康づくり シンポジウム；いかに山での死を防ぐか ワークショップ；救急用機器の利用方法
13	1993	宮城 蔵王	松野正紀	東北大学	葛西森夫；マタギと東北の山 オズヴァルト＝エルツ； 急性高山病と高所肺水腫の病態生理学と 治療の進歩 シンポジウム；合理的で安全な登山のために —装備と携行品の医学的再検討—
14	1994	千葉	栗山喬之	千葉大学	沼田 真；ヒマラヤの環境保全 早田義博；ネパールと医療—ペリチェ診療所20年 ジャン ポール＝リシャレ；標高6,542mにおける 赤血球生成と腎機能 ピーター＝ハケット；マッキンレー峰における 登山医学研究と山岳救助の10年 住吉仙也；群馬岳連サガルマータ冬期南西壁初登頂 (1993～1994) シンポジウム；中高年や慢性疾患患者と高所登山
15	1995	湘南	堀井昌子	大和保健所	イヴゲニイ＝ギッペンライター；超高度への人体暴露 ジョン＝サットン；『エヴェレスト作戦』実験から 学んだこと 原 真；低圧訓練からヒマラヤへ 長尾悌夫；凍傷の治療 シンポジウム；高校生・大学生の部活動における 高山病 パネルディスカッション；女性と高所登山
16	1996	乗鞍岳	滝 和美	名古屋大学	高橋英世；高気圧環境の臨床医学的応用 —低気圧環境の対局として 磯村思尤；旅行者伝染病について

3. 論文

回	年	開催地	会長とその所属		特別講演・招請講演・シンポジウム
17	1997	東京	関口令安	都立広尾病院	早田義博；山岳診療所の歴史 重廣恒夫：最近の登山事情 シンポジウム；高所順応トレーニングは有効か 山岳診療所の現状と問題点 パネルディスカッション：各遠征隊における健康管理 高所ツアー・トレッキングにおける安全対策
18	1998	松本	小林俊夫	信州大学	The 3ed World Congress on Mountain and Environmental Medicine and Physiology (中島道郎会長)と共催 特別講演12題 シンポジウム7席51題 特別講座2席8題 一般演題・口頭発表45題 展示発表92題 参加者総数：世界32ヶ国, 130名, 国内約300名
19	1998	立山 山麓	北野喜行	金澤大学	永坂鉄夫：私の高所医学事始め 川田邦夫：最近の日本の南極観察 シンポジウム；山岳遭難 山岳環境衛生 パネルディスカッション；中高年者の登山

他の学会発表のようにその研究が『オリジナル』である必要もありません。登山医学的測定値はすべて少数例の報告であり、統計処理が出来ません。それ故多くの研究者が繰り返し同じテーマで資料を集める必要があります。ですから、なまじ功名心に駆られて『オリジナル』ばかりを追求しようとする研究者よりは、地道に、繰り返し丹念に資料を収集するタイプの研究者の方が登山界にとってはむしろ有用です。またそれには、必ずしも医師や医学研究者である必要もないのです。登山するたびに、ひとつのテーマを一定の条件に従って測定を繰り返す。そして得られた資料はその都度本会で発表して頂く。こうして集積されたデータは、いつの日にか統計的に処理され得るに至り、学説となって一般に受け入れられるところとなるでしょう。本会に一般登山家のご参加を期待する所以です。

本会機関誌『登山医学』

シンポジウムには毎回30題前後の一般演題が寄せられます。それに特別講演やシンポジウムなどの内容も含めて、1冊の論文集にまとめあげ、年に1回刊行します。現在19巻迄に至りました。公的な学会誌としての扱いは受けていなくとも、これは日本の登山医学界の動向を知る上では欠かすことの出来ない第一級資料です。抄録ながら英文も付いており、世界中の主だった登山医学研究者や研究機

3. 論文

関には送られています。皆さんも是非読んで下さい。バックナンバーはまだ沢山残っています。まとめてお求め頂いたら随分格安になる筈です。(申込先は文末記載の本会事務局宛)

国際交流

世界で最初の持続的登山医学関連組織は『国際ハイポキシア・シンポジウム』です。これは1979年にカナディアン・ロッキー山中で発足し、以来2年ごとに開催されていて、2001年にはその第12回目を迎えます。毎回300名近くの参加者の中、本会からの参加者数、発表演題数は毎回全体の10%以上を占めています。理事会にも本会から3名が加わっています。

本会に4年遅れてスイスに発足した『国際登山医学会 (ISMM)』にも本会から多数加名しており、一昨年はその『第3回登山と高所環境に関する国際医学会議』が松本で開催されました。小林俊夫・増山茂両先生の補佐を受けて筆者が主宰したのですが、小林先生は共催した第18回本会シンポジウムの会長でもありました。第4回ISMM国際会議は本年10月チリーのアリカで開催される予定です。

本会のお陰で、今や日本は世界の登山医学界をリードするに至ったと言って過言ではないのです。おわりに

本会は日本の、いや世界の登山界に医学がどのように貢献出来るかを問わんとする組織です。でも、医師など医療関係者ばかりの集まりでは意味ありません。一般登山家の皆さんと一緒に考えて、実行してこそ意味があるのです。本誌読者の皆さんの理解と参加を期待しています。

日本登山医学研究会事務局連絡先：

〒701-0193 岡山県倉敷市松島288 川崎医療福祉大学 (電話：086-462-1111代)

健康体育学科 日本登山医学研究会事務局 (小野寺 昇教授)

(日本登山医学研究会代表幹事)